天理参考館 ニュースレター

天理大学附属天理参考館
発行日：2006. 10. 26
発　行：天理大学附属天理参考館
編　集：広報普及

発刊にあたって

天理大学附属天理参考館
館長　木村　秀則

この度、当館の活動をより多くの方々に情報として発信したいと考え、『天理参考館ニュースレター』を刊行することになりました。

＊

一九三〇(昭和五)年四月に天理外国語学校(現天理大学)の校舎の一教室に設けられた「海外事情参考品室」が当館の始まりです。爾来、幾たびかの移転を経ながら、二〇〇一(平成十三)年十一月に現在の建物に移り、新しい装いでオープンし、五年が経過しようとしています。

当館は海外の国々、諸地域の人々の生活習慣・信仰習俗などの生活文化について、理解を深める一助となることを創設の趣旨としています。その目的のために、人々の生活の中で手垢のついた「もの」を集めることから始め、さらにはそれを造り、使う「ひと」の「こころ」の理解に至ろうという視点に立って、さまざまな活動を行っています。

＊

「博物館の望ましい姿―市民とともに創る新時代の博物館―」という報告書が二〇〇三年三月に財団法人日本博物館協会によってまとめられました。そこには各博物館がそれぞれの特徴を活かした活動を行い、博物館全体として総合的な力を向上・発展させることが希求される、との内容が提唱されていました。

当館においても創設の趣旨に沿った従来からの館独自の活動をさらに推進していく中で、社会教育施設として、地域社会への奉仕という観点からも、より親しみやすい企画展、トーク・サンコーカン(公開講演会)、ワークショップなどのイベント開催のご案内、所蔵資料、発掘調査などの情報をこの『ニュースレター』に載せてお伝えしていきたいと思っております。

＊

当館入口正面の前庭(駐車場)にはサクラ、サツキ、ソテツ、アベマキ、アメリカンフーといったさまざまな木々が立ち、四季折々の表情を演出しています。ちょうどこの季節は、高さ25mのアベマキの木の下では、ドングリやトゲトゲの葉が来館者を迎えています。(『余滴』欄をご覧下さい。)

余滴

当館の前庭にはシンボルツリーとしてアベマキが植えられています。このアベマキとは一体どんな木なのでしょうか？

アベマキ(ブナ科　コナラ属)

アベマキは落葉高木で、クヌギと大変似ています。

日本では本州(山形、長野、静岡県以西)、四国、九州地方に自生し、奈良県ではクヌギ、コナラと共に広く分布します。また、海外では朝鮮半島、台湾、中国、インドシナ半島まで分布します。堅果は大型で卵形、俗に言うドングリです。古代人はドングリを食用としていました。樹皮はコルク層が発達し、コルク製品として、またクヌギと同様に薪炭材やシイタケ栽培の榾木(ほだぎ)にも使われます。クヌギは万葉植物の一つで古名をツルバシと言い染織に使われましたが、アベマキも同様に用いられたと考えられています。

特別展示

教祖百二十年祭特別展

正倉院宝物のルーツと展開
―参考館撰―

◆会期／9月20日(水)～12月4日(月)

正倉院展の季節です。あの繊細華麗な天平芸術の粋は一体どこから来たのでしょう。

館蔵の中国・朝鮮半島・ペルシア・インドなどの諸作品に正倉院宝物のルーツをもとめ、さらに、その後の展開を通して、古代日本の国際性や文化交流の結実を考えます。

今回の展覧会では、奈良時代に製作されたとみられる伎楽面を初公開しています。この伎楽面は、『集古十種』(江戸後期の老中・松平定信の命で編纂された古い宝物の図版集)に掲載された「東大寺所蔵伎楽面」の一つとして紹介されています。

伎楽は、7世紀初めに中国大陸より伝えられたと『日本書記』に見られます。その後、奈良時代の「大仏開眼供養」でも上演され、正倉院にはそのときに使用されたと思われる伎楽面が伝わっています。

銀胎鍍金聖樹水禽文八曲長杯
イラン　6～7世紀　長30.6cm

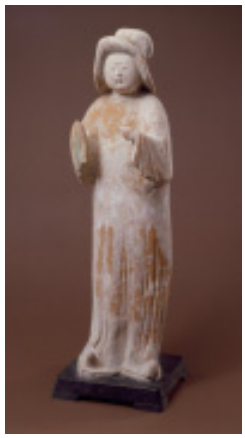
会期中には当館副館長・近江昌司による列品解説とトーク・サンコーカン(公開講演会)を左記のとおり開催いたします。

■列品解説

日時／11月27日(月)午後1時30分から
場所／当館3階企画展示室

■トーク・サンコーカン

東西文化の流れシリーズ①／全3回
「正倉院とシルクロード」
日時／10月28日(土)午後1時30分から
会場／当館研修室



紅胎加彩女子　中国　唐代
高 64.8cm

展示風景
右端　展示資料が今回初公開の伎楽面

発掘調査

イスラエルにおける発掘調査(一)

天理とイスラエルの関わりは中山正善天理教二代真柱から始まります。第二次世界大戦後、我が国でも西アジアで発掘調査を行おうという動きが起こり、日本オリエント学会の中心的な役割を果たしていた二代真柱らの力により、昭和39年にイスラエルのテル・ゼロール遺跡で初めて鍬がはいったのです。このテル・ゼロール遺跡出土遺物の半分は当館に所蔵され、我が国では唯一、まとまったイスラエル出土の資料となっています。

その後、発掘は中断されていましたが、平成2年から平成16年にはエン・ゲヴ遺跡の調査が天理大学の金関恕氏を中心に行われ、さらに平成18年からはテル・レヘシュ遺跡の調査を天理大学が中心となって行っています。なお、当館の職員もテル・ゼロール遺跡の調査から参加しています。

さて、この度、調査が開始されたテル・レヘシュ遺跡はイスラエル北部のガリラヤ地方にあり、イスラエル国内では最後に残った手つかずの遺跡でした。この遺跡は南北約三五〇m、東西幅約二六〇mの楕円形の丘となっています。前期青銅器時代(紀元前三千年頃)からビザンチン時代の長期にわたって人びとが居住していた都市遺跡です。特に後期青銅器時代には旧約聖書にみられる「アナハラト」という名前の町に想定されており、当時のエジプトと深い関係があったことがわかっています。

今年3月の第一次調査では鉄器時代やローマ時代の建物跡がみつかっており、さらに下層には青銅期時代の遺構が埋まっていることがわかりました。8月には第二次調査を計画して準備していたのですが、ご存じのレバノン紛争でミサイルの届く範囲内になってしまい、調査を延期しました。これからさらに調査を続行していきます。来年3月には延期していた第二次調査を行うことにしています。大きな成果があがることが期待されます。これから何度かにわたり、調査の様子をお知らせしたいと思います。(山内)

レヘシュ空撮(西より)

鉄器時代の建物跡

発掘された石棺墓

周辺の見所

天理大学創設者記念館

天理大学構内の南西隅に一棟のシャレた洋館が聳えています。この建物は中山正善天理教二代真柱が旧大阪高等学校時代に執務室兼勉強室とされたもので、昭和30年に東大阪市の若江岩田から移築されました。大正末年にアメリカから輸入されたわが国では古い洋風住宅の一つで、内部は一部和風に改築されていますが、建築学的に高い評価を受けています。移築後、様々な用途に使われてきましたが、平成17年に天理大学創立八十周年を記念し、創設者記念館として生まれ変わりました。1階に創設者の紹介と天理スポーツ展示室、2階には天理図書館と天理参考館の展示室が設けられています。創設者中山正善氏の息吹に触れることが出来る絶好の建物と言えるでしょう。現在修理中。（竹谷）

創設者記念館外観

資料紹介

武人埴輪（重要文化財）

群馬県太田市世良田町出土
6世紀　高134cm

埴輪が古墳に並べられるようになったのは、4世紀のことでした。まず円筒形の埴輪が作り出され、その後人や動物などの形の埴輪が作られるようになりました。

写真の埴輪は、3階の「世界の考古美術」展示室の入口正面に展示しています。当館には重要文化財が2点ありますが、そのうちの1点です。

よろいとかぶとに身を固め、左手に弓を持ち、腰に刀を、右腰から矢を下げた、完全武装の戦士の姿です。よろいを組み立てる革紐の縫い目まで表現してあり、全国で多数出土している埴輪の中でも群を抜いて丁寧に作られています。

立派な姿ですが古墳に葬られた貴人ではなく、貴人を護衛する人を表しています。古墳に立っていた時には、貴人の埴輪の近くに、いかにも護衛官のように並べられていたことでしょう。

そっくりな埴輪がほかに4体知られており、そのうちの1体は200円切手の図柄になっているので、見覚えのある方もいらっしゃると思います。切手の図柄になっている埴輪は東京の国立博物館にあり、国宝の指定を受けています。（藤原）

資料紹介

コリマ様式の土偶

日本の古墳時代と同様に、古代メキシコでは土偶が多数つくられました。その中でもコリマ様式と呼ばれる西部海岸地方の古墳から出土するものは、モチーフの多様性と見た目のユーモラスさにおいて他と一線を画しています。創作の対象になったのは、喜怒哀楽をストレートに表した市井の人々や丸々と太った犬など、日常にありふれていたと思われる存在で、当時の生活を想像する上の手がかりとなっています。

今回紹介する土偶はヘルメットとよろいを身につけた男性をかたどったもので、手には棒状のものが握られています。この棒を武器と見なせば、戦士を表した土偶であると考えるのが妥当でしょう。しかし、その一方で違った見方もあります。当時、この地方では「ペローター」と呼ばれる球技がさかんに行われていました。この土偶が持つ棒はそのバットではないかというのがもう一つの説です。みなさんはどちらだと思われますか。（梅谷）

メキシコ西部　ハリスコ州北部
推4～5世紀　土器　高41.4cm

発掘調査

天理参考館分室

博物館の主な活動の一つに調査研究があります。当館では、布留遺跡や東大寺山古墳などの埋蔵文化財の発掘調査を、考古美術部員が早くから手がけてきました。昭和40年代の全国的な開発ブームの時には、天理でも天理教関連の施設が盛んに建てられるようになりました。同時に、開発によって壊されてしまう埋蔵文化財を守ろうという社会的な気運が高まり、事前の発掘調査が必要となりました。こうして、昭和46年3月「布留遺跡発掘調査団」が館外からの団員を含め編成され、考古美術部員が発掘調査を担当しました。

発掘調査の依頼は年々増え、当時の調査団では対応が難しくなってきました。その頃、文化庁と奈良県教育委員会から、布留遺跡範囲確認調査が提案されました。この調査は、布留遺跡の範囲を確認し、遺跡の性格を知ることによって、遺跡の保存活用や開発にも役立つ材料を提供することが目的でした。これをうけて当館では、昭和51年4月、調査団の組織を改め「布留遺跡天理教発掘調査団」とし、考古美術部員がより発掘調査に専念できるよう「天理参考館分室」を併設しました。

その後、発掘調査の依頼地が布留遺跡の範囲を超えるケースが増えたため、昭和56年4月「埋蔵文化財天理教調査団」と名称を改め現在に至っています。（高野）

公開講演会

トーク・サンコーカン

広く一般の方々に当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。

講演は、いずれも午後1時30分(受付は午後1時)から。受講無料(入館料が必要)。

「東西文化の流れ」シリーズ全3回

現在開催中の特別展「正倉院宝物のルーツと展開―参考館撰―」に合わせ、観覧に役立つ話三題をシリーズでお届けします。

ユーラシア大陸を行き交った壮大な文化交流を"モノ"を通して考えます。シリーズ①は2ページに掲載しています。

第一六七回（シリーズ②）

「朝鮮半島に伝来した西方文物」

◇月日／11月25日(土)

◇講師／竹谷俊夫(当館学芸員)

慶州にある古新羅の王陵からは、ローマンガラスや金製品・各種青銅器・馬具などが出土します。これらは中国三燕を経由して伝えられた北方・西方文化の所産と考えられ、後の統一新羅時代になっても、瓦当文様や石造彫刻などに西方文化の伝来をたどることができます。

第一六八回（シリーズ③）

「日本の中の西方文物」

◇月日／12月16日(土)

◇講師／高野政昭(当館学芸員)

古代日本に伝えられた様々な文物は、中国や朝鮮に由来するものがほとんどですが、遠く西アジアに源流を求められる資料も知られています。今回は、シルクロードを旅した西方文物について考えます。

「オリエントの古代都市」シリーズ全3回

オリエントは世界に先駆けて都市国家を成立させた地域です。それ以後、都市は歴史の重要な役割を果たしてきました。

今回はシュメール、パレスチナ、ミケーネと話題性のある都市文化を、調査成果を踏まえて紹介します。

第一六九回（シリーズ①）

「我が名はグデア、神に呼ばれし者―シュメールの都市国家―」

◇月日／1月27日(土)

◇講師／巽　善信(当館学芸員)

人類最初の国家は都市を単位としました。担ったのはシュメール人です。彼らは文字を持ち、自らの歴史を記しました。「歴史はシュメールより始まる」と言われるのもそのためです。今回は都市国家ラガシュの支配者で実在したグデアに焦点をあてて、都市国家の成立とその崩壊を見ることにします。

閃緑岩製グデア頭像

第一七〇回（シリーズ②）

「聖地の考古学・ソロモン王の時代を掘る―パレスチナの古代都市遺跡―」

◇月日／2月17日(土)

◇講師／日野　宏(当館学芸員)

古代パレスチナでは数多くの都市の興亡がみられました。今回は10年に亘って日本隊が調査を行ってきたイスラエル国ガリラヤ湖東岸のエン・ゲヴ遺跡を中心に、当地域の遺跡を紹介していきます。

第一七一回（シリーズ③）

「黄金の都市ミケーネ―シュリーマンの発掘物語―」

◇月日／3月3日(土)

◇講師／飯降美子(当館学芸員)

ホメロス叙事詩で語られるとき必ず「黄金の―とか「黄金に富んだ―と描写される古代都市ミケーネ。シュリーマンによる発掘と、近年の調査によって明らかになってきた内容を踏まえ、ミケーネの真相について考えてみたいと思います。

獅子の門　前1250年頃　ミケーネ

お知らせ

「関西文化の日」入館無料

「関西文化の日」は関西(2府7県)圏域内の方々に広く美術作品や資料に接する機会を提供し、美術・学術愛好者の増大を図るとともに、圏域外に向けても"文化が息づく関西"を広く、かつ力強くアピールして圏域への集客を図ることを目的に催されます。

当館は本年もこの趣旨に賛同し、左記の3日間無料で常設展示および特別展「正倉院宝物のルーツと展開―参考館撰―」を観覧いただけます。

◇期間／11月18日(土)～20日(月)

利用案内

開館時間　午前9時30分～午後4時30分(入館は午後4時まで)

休館日　毎週火曜(祝日の場合は翌日)ただし毎月25日～27日、4月17～19日、7月26日～8月4日は開館

創立記念日(4月28日)

夏期(8月13日～17日)

年末年始(12月27日～1月4日)

入館料　大人400円、団体(20名以上)300円、小・中学生200円

交通　電車／JR桜井線天理駅・近鉄天理線天理駅下車　東南へ徒歩約30分

車／西名阪道天理I.C.から国道169号線を南へ約3㎞　駐車場あり(無料)

その他　団体見学は事前にご連絡願います

世界の生活文化と考古美術の博物館
天理大学附属天理参考館
〒632-8540
奈良県天理市守目堂町250番地
Tel 0743-63-8414
Fax 0743-63-7721
URL http://www.sankokan.jp/

編集後記

天理参考館ニュースレター創刊号を発行しました。

今号は、平成18年度開催中の展覧会や当館収蔵資料、発掘調査の紹介、またトーク・サンコーカン(公開講演会)などを中心に編集しました。今後も様々な情報や話題を掲載していく予定です。(M.K)